

---

# 運命という名のラズベリージャム

浅緋 奈々葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

運命という名のラズベリージャム

### 【Nコード】

N8674W

### 【作者名】

浅緋 奈々葉

### 【あらすじ】

一人黙々と残業していたんだけど、何故こんな目にあうのかしら？  
一癖二癖、いやそれ以上癖のある後輩に振り回される先輩のお話。  
お話上、同性愛（BL）が出てきますが、いたってノーマルなお話です。

## 運命という名のラズベリージャム 1

「ねえ、抱いて」

何を言われたのか、何が起こったのか、全く分からなかった。

今ですね、ワタクシ、原紗季はりさきは、残業をしてたんですよ。

困った事に、八時過ぎても終わりが見えずに後一時間頑張って目処をつけて帰ろうと決めて、黙々と仕事をしていたんですよ。

そして、後十分つてところで、突然やってきた後輩に後ろからイキナリそんな事を言われたらフリーズするのは見えていると思いません？

その年、凄い新人が入ってきたという噂が流れてきたのは、割と早い時点だった。

その噂が普通じゃない。

新人研修で恋愛関係で同期が取り合ったとか、研修指導をしていた先輩社員が夢中になったとか、配属が決まっていないうちからそんな噂が流れて、配属が決まった今プラスされた噂は、

二つ上の先輩と五つ上の先輩と諦めきれないらしい同期三人が取

り合っているとか、

後輩が出来たら、五つ上の先輩が脱落してそこに後輩が一人はいつてまた三人で取り合いをしているとか、

本当かどうかは定かじゃないけれど、とにかく普通じゃない噂が絶えない新人だった。

その良からぬ噂の後輩が『石黒真一』  
そして、噂の相手は皆、男性だった。

最初に良からぬ噂を聞いた時は、そりゃ嘘だろ、そんなBL漫画みたいな話はあるか！ってBL漫画見たことないけど。そういう訳で、噂は噂だと思っていたのだ。

そして、ウチの部署に配属されることになって、彼が顔を見せた時、納得した。

確かに可愛い。

私なんて完全に負けてる。負け犬ごもつとも。

…これは、受子さんだわ。

彼を見ての第一印象がこれだった。

BL用語で『受』はいわゆるネコ、ゲイで女性役をする男性のこと。

そういうBL漫画を読んでもいないのに、何故知っているのか、  
そういうのが大好きな友達がいて、そういう話をよくしてくれるの  
だ。

それにそっち系の友達が少なからずいるんだよね、何故か。

よく考えると私の友達ってコイわ。

だからって訳じゃないんだろうけど、何となくゲイな人が分かる  
ようになっていた。

そう、私の見解では、『受』な彼は、新人でもそつなく仕事をこ  
なす。

噂先行だった皆も彼の人当たりの良さから、いい子じゃん、って  
事で普通に接するようになっていた。

そんな彼も今じゃバリバリと仕事をこなし、上司にも一目置かれ  
る存在。

私は、仕事さえしつかりしてくれれば、プライベートなことはど  
うでもいいので、文句はなかった。

それにそっちの友達がいたから偏見はなかったから、他の人より  
取っ掛かりは早かったと思う。

だからといって、他の人より仲がいいって事はなかったんだけど。

そんな事はどうでもいい、現時点の現状だよ。

たっぷり時間をかけてフリーズしてから、何とか自動解凍させて、  
ギクシャクとその声のする方を見ると…

鼻血が出そうになったわよ…

だってさ、石黒君がさ、ピンク色だか紫色だかのオーラ纏ってさ、  
スーツのジャケット脱いで、ネクタイ外してさ、何故かシャツのボ

タンが四つほど外れてて、そこに手を入れてさ、顔っていうか目が完全に誘っているのだ、私を。

それが、壮絶色っぽい。その色っぽさ、ちょっとでもいいから分けて欲しいよ。

それより「抱いて」って、イヤイヤ私、女ですから、どっちかって私、抱かれる方ですから。

というかさ、「抱いて」って完全に『受子』さん発想よね。

噂の粹を脱してなかったのに、完全に決定じゃん。ってことは、私、からかわれてるの？

振り向いたところで又フリーズした私が、又自動解凍して発した言葉は、

「そ、それより、お腹、空いてない？石黒君」  
だった。

## 運命という名のラズベリージャム 1 (後書き)

気まぐれな更新になると思いますので、生温く見守ってくださいませ。

## 運命という名のラズベリージャム 2

おりしも今日は金曜日。

そんな金曜日に残業していた私も私だけど、仕方ないのよ。

ぶちぶちと思いつつ、あからさまに残念そうな石黒君を連れて歩く私。

何でそんなに不満そうな顔をして私を見るんだ、石黒!!

「あれで落ちなかつたヤツいないのに」

って小さな声で言わなかつた? ヤツって! ヤツって! 石黒、君は一体何をしてたんだ!!

「有無を言わず押し倒しておけばよかつた? でも、やり方よくわかんないし」

オイオイ、石黒、駄々漏れだけど? 押し倒すって、やり方よくわかんないって…

もうこれは、真正だ、間違いなく真正だ。

変な汗がダラダラと流れていく。

これは無視だ、聞かなかつたことにするぞ、そう思いながら駅前に向かつた。

換気はされているが、モウモウと煙の上がる店内。

食欲をそそる肉の焼ける匂い。これだけでご飯が何杯いけるだろう。

でも今日のご飯よりビールの方がいい。

生ビールのジョッキを片手に焼くのはハラミとカルビとホルモン。

カルビって美味しいんだけどキツイのよね、油が。サンチュがな



いと食べられない。

今日みたいな日は特にね。

レバ刺しとかユツケを肴に、と思っけていても件の事件でメニューに載ってないし、仕方がないからお肉をチマチマ焼きながらサンチユで巻いて食べつつ、キムチやチヨレギサラダを摘んでいた。

何で焼肉屋に入ったのか、

それは駅前を歩いていたら、突然彼が「ここに入りましょう！」  
と言って私の手を引いて焼肉屋に入っていったからだ。

焼肉はそれなりに好きですよ、気の知れない友人と行くのはね。

こんな状況で焼肉なんて食べれっか！

とは思っけど、箸はハラミをつかんで口に入れた。

「ところで、何で私にあんなこと言ったの？石黒君、ぶっちゃけ、ゲイでしょう？」

因みにこの焼肉屋は半個室になっていて、そう簡単には話し声が聞こえないようになっていて、と思いたい。

びっくりした石黒君は箸を置いてビールを飲んでから私を見る。

「面と向かって言われたのは初めてです。そうですよ、俺はゲイで、バリ受です」

飲んでいたビールを噴出すところだった。

だれもそんな、「バリ受」って言葉言わなくなっけていいのに、何  
考えてんだ、石黒！

「俺、物心ついたときから男にしか興味がなくて、女の子と付き合  
つてみたけど全然駄目で、今までずっと男としか付き合ったことな

かつたんです」

…はぁ、さいでっか。

よくあるエピソードよね、私の友達である某オネエも似たようなこと言ってたし。

「だから、女の人に惹かれるなんて、好きになるなんて、初めてなんです！！」

持っていた箸を肉ごと落としてしまった。

思わず下を見る。肉の下に受け皿があつてよかつたよ。

「もう一生そんな事は無いと思つていました。最初で最後なんです！俺と付き合つてください！！」

そんな勢いよく言いながら、眼をウルウルさせて可愛くしてもね…

付き合つて…

私に付き合つている人がいないのかは確認しないのか。

「原さんに彼氏がないのは確認済みです！お試しでもなんでもいいんです、お願いします！」

先読みされてしまった…

誰に確認したんだか…たしかに付き合つてる人はいないけどさ。

「えっと、石黒君、あのさ、その…正直、私は君がゲイだつて思つていたからさ、恋愛対象外なんだよね」

某オネエだつて、男らしい時からの付き合いだけど、恋愛対象に

見たことは一度も無い。

「だったら、今からでもいいんです、俺をちゃんと見てください。こんな気持ちになるのは久しぶりで、どうしようもないんです、俺を…」

「俺を受け止めてください！」

せつかく持ち直した箸を、又落としてしまった…  
今度は肉を持っていなかったからまだましだ。

受け止めて欲しいのは私の方だよ…

がつくりとうなだれて、力尽きてしまいそうだ。

「言っとくね、私女だからね。正真正銘、昔から心も体も女だからね」

そここのところ確認するのが遅いだろう！と自分に突っ込みつつ、これだけは確認しないとね。

「わかっています！俺も悩んだんです！」

まあそうだよね、ゲイとして生きていこうって決めてただろうに、今更女を好きになるなんて思ってないよね。

何だか頭が痛くなってきた。

「俺が嫌いですか？」

ウルウルと目を潤ませ、まるで捨てられた子犬のように私を見ている石黒君。

「嫌いじゃないけど」

たとえ嫌いでも、こんな状況でこの子に嫌いってはっきり言える人がいたら見てみたいよ。

「じゃあちよつとずつでいいんです、俺を知ってください!」

私の手をつかんで、熱く見つめてくる石黒君。

「はあ…」

石黒君で意外に強引な子なのね。

何て考えながら、石黒君を蹴っ飛ばして逃避行したい、なんて考えていた。

### 運命という名のラズベリージャム 3

「よつつ、このゲイ殺し！！」

エ。  
ニヤニヤと笑いながら、私の前にハイボールを置く男、いやオネ

「それ、おかしい、私は今までゲイにもてた事ない」

カウンターに突っ伏したいが、ハイボールが置かれちゃったから仕方がない、私はグラスを手を取った。

「あら、あの子ってシン君でしょ、シン君って言えば知る人ぞ知る、  
「よ

あれ？石黒君ってシンって名前じゃないよね。

「あんだ、この界限じゃ本名を名乗らない人は結構多いわよ」

「へーそうなんだ」

そういえば、オネエもこの店じゃ『アキラ』って名前だし。

本当のオネエの名前は『高塚竜義』たかつか たつよしっていうとつても男らしい名前を持っていてのよね。

納得しつつ、オネエに作ってもらったハイボールに口をつけた。

土曜日の夕方、まだ店は開店していないが、無理矢理店に入る私。そんな私を、仕方がないわね…と受け入れてくれるオネエ。

「で、そのシン君は知る人ぞ知るなの？」

石黒君で、けっこう可愛いからこの辺じゃ有名なのかな？

「あの子はね、魔性のゲイなのよ」

「…は？」

なにそれ、どこぞのBL漫画みたいなネーミング。

「ノンケをその気にさせるのは当たり前前、受けだった子もタチにさ

せるほど魅力的らしいわよ」

「はあ」

「本当にいい男ばかりが引つかかって…それであの子をめぐって毎日何人も男があの子を泥沼の取り合いをしているらしいのよ」

「へえ」

本当に羨ましいと思ったらありやしない、なんて呟かれても、どういう返事をしたらいいの分からないわ。

というか、石黒、社外でもそうなのか！

「でも半分くらいはデマよ、やつかまれて言われた嘘に尾ひれ背びれでそうなったみたい。でも本人は気にしてないみたいね」

「ふーん」

オネエはどこからそんな情報を仕入れてくるんだか…

「あの子ってば、ウチの店に来るときはいつつもかっこいい男付きでね、本当にかわいいのよねえ…」

ほうっ、とため息をつきつつシナを作る。

因みにオネエは『リバ』と言ってリバーシブルで受けでもタチでもいける人らしい。

聞きたい訳でもないのにベラベラと話すオネエのせいで変に詳しくなつて、とつても嫌だ。

男同士の閨を詳しく知って何か良い事あるのか！と、私は言いたい。

私の某B L好きな友達は喜んで聞くだろうけどさ。

オネエと私の付き合いは、高校までさかのぼる。

同じクラスで隣の席になったのが始まり。

何だかんだ気があって、だからって好きになるとか付き合いだとか思うことのない、純粹に気の合う友達だった。

優男で女子にもてたオネエ。でも誰も相手にしなかった。

その理由を知った時は本当にショックだったな。

高校生だったけど、好きな人とか、もちろん付き合っている人も

いない私には同姓を好きになるって事がよくわからなくて、

「そうなんだ」

と言ったけど、どうしていいのかわからなかったんだよね。

それでも、オネエはオネエ。どこかが変わる訳じゃない。そう思ったら、シヨックは軽減された。

「まあ、あんたも相当よ。こんなところに一人で来て酒かつ喰らってんだから」

「そうかな」

だって、こんな所にお店構えるオネエが悪いんじゃない。

それに、ここはどの店より安心だもん。

こんな所とは、知る人ぞ知るなその道の人にはメツカと呼ばれる場所。オネエと同じ様な人がウヨウヨいる。

そんなメツカ的な場所に店を構えたオネエは、やり手なのだから。ヒトツテならぬゲイツテにきいたんだけどね。

お、我ながらウマイ！

…

気のせいじゃなければ最近、現実逃避することが多くなった気がする。

そう思いながら、本気でどこかに行ってやるうかと、カウンターにだらりと寝そべった。

## 運命という名のラズベリージャム 4

「何だよ、オメーまた来てんのかよ」

むっ、何よ、また来てんのかよ、って。

でろり、とカウンターに寝そべっていた私はがばつと起き上がり、キツと睨んだ。

「いいじゃない、また来たって、まあちよつとはお店に迷惑かけてるかもしれないけど、大人しくしてるし」

私が女だからって、イチャモンつけて来る人は少なくはない。でもそんな人は無視しちゃうもん。それになによりオネエが庇ってくれるもん。

「まあ、ここに来るって事はオトコがいないって証明してるもんだよな」

哀れなもんだよ、と鼻で笑いながら一つ間を開けてカウンターに落ち着く。

ムツカー！何よ哀れってっ

確かにオトコはいませんよーっだ。

本当の事だけに何も言い返せないから、ブーっとな膨れて睨んだら、ふふんと鼻で笑われた。

ムツキー！何よっ、その態度！

「あら、仲が良いのね。妬けてきちゃっ」



オトコ、早瀬<sup>はやせ</sup>大地<sup>だいち</sup>の前には置いたのは、私と同じハイボール…じやなくて、ただのジンジャーエール。

背が高くて男前のクセに、唯一の欠点か、酒に弱いのだ。

ケーツケツケツケ、ざまあみる。

カッコ良くてモテるはずなのに、こういったバーで男を口説く事もできないのだ。

まあ、潰れてた客であるコイツに手を出すオネエもオネエだけだね。

何で知ってるかって、私その場に居たもん。

見るからにオネエ好みの良いオトコが座った目で酒を頼んでグラスの半分も飲まない内に潰れちゃって、大丈夫かな？って思ったから、遅くなるといつもオネエのウチに泊めてくれたのに、今日に限ってダメって言われて、タクシー代掴まされて追い出されたんだもん。

あの時、彼の行く末を祈らずにはいられなかつたわ。

でも、フタを開けてみると…

私が心配しなくても、いや寧ろ私の心配しろよって位ムカつくオトコだった。

その上、何時の間にかラブラブなバカカップルに成り下がりがつていた…

店にいる時はそんなにベタベタしてなくてこれまた普通な感じだけど、店を一步出たら、目も当てられないわよ。

後ろからついて行く私の身にもなってくれていつも言うけど、

鼻で笑われる始末。

キー！ムカつく！！

思い出したらムカついてきた。

何か言っただけでやらないと気が済まん！と意気込んでいると、オネエがカウンターから身を乗り出してヤツに耳打ちしていて、ヤツは私の顔を見てニヤニヤしている。

ああ、みつちゃん好きそう…

B L好きな友人のみつちゃんこと山本美智子やまもとみちこはこのバカツプルのこういった場面を見るためだけに月一でこのバーに通っている。

彼女の隣にいます、「今の場面を写真におさめたい！」とか、聞いているとお酒を吹き出しそうな言葉をブツブツ呟いているのだ。いつも、自分の中のカメラだけにおさめといてください、って言うてるけど。

まあ、それが彼女の活力になってるっていうなら何も言わない。彼らの一挙一動にワーキヤー言っている彼女を見て、そう思う事にしたのだ。

にしても、

…嫌な予感がする。

アレだ、アレ。私がほんの一瞬忘れていて、一生思い出したくない、例の石黒くんの話をしているに違いない。

コイツだけには知られたくなかった。でもオネエがいるかぎり無理な話なんだよね…

もう本当、勘弁してほしいよ。

二人に何と言われるか、げんなりしながら残りのハイボールをあ  
おった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8674w/>

---

運命という名のラズベリージャム

2012年1月3日00時56分発行